

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 29 年 12 月 3 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	齋藤 美保

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
タンザニア・カタヴィ国立公園
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
カタヴィ国立公園における、休息時と子育て期のキリンの環境利用に関する研究
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 29 年 5 月 8 日 ~ 平成 29 年 9 月 10 日、10 月 10 日 ~ 12 月 2 日 (178 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
Tanzania Wildlife Research Institute, Dr. Keyuu
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
本渡航の目的は、タンザニア・カタヴィ国立公園における、キリンの休息時と子育て期における環境利用について明らかにすることである。 本調査では、Adult male28頭、Adult female21頭、Sub-adult male10頭、Sub-adult female3頭、Juvenile2頭、Neonate2頭、計66個体を識別した。そのうち、計五回以上観察した Adult male12頭、Adult female11頭、Sub-adult male8頭、Sub-adult female3頭、Juvenile2頭、Neonate2頭の計38個体を社会ネットワーク分析に用いる予定である。今後その分析を進める中で、2010年以降のデータと照らし合わせ、長期における個体間関係の変化や、新規個体の参入によるネットワークへの影響を明らかにしたい。 休息時における環境利用については、10分ごとに各キリンの位置情報および行動を記録した。その結果、計51個体の位置情報を記録した。今後、衛星画像を元に生息環境のカテゴリ分けを行い、そこに前述の位置情報をプロットすることで、休息時にキリンはどのような環境を選択する傾向にあるのかを明らかにしたい。 子育て期における環境利用に関して、本調査期間中に計2ペアの母仔を確認した。印象としては、2ペアとも子育ての場として、open areaよりもwoodlandを利用する傾向にあった。今後分析を行い、実際に子育て場として利用されているのはどの植生であるか、もし偏った場所を好んで子育て場として使用するようであればなぜ母親はwoodlandを子育ての場として選択しているのかを考察していきたい。 本調査の目的とは異なるが、調査期間中に足を引きずっていたメス個体と、目から大量の出血が認められるメス個体をそれぞれ観察した。どちらの個体も2010年から観察をしている個体で、ケガの影響による被食の可能性が心配された。足を引きずっていた個体は常に集団の後ろで、他のメンバーを追うような形で遅れながらも歩いている様子が観察された。しかし、調査期間の終盤には治癒したのか、通常の動きを取り戻し、集団の先頭に立って歩くまでに回復した。目からの出血が認められた個体は、新生児の母親であったため、仔共々被食されないか、ケガによる影響がとて心配された。出血部分には多くのハエが飛び交っていたので、感染症の心配もしたが、一か月ほど観察を続けるうちに、次第に出血が収まり、目の腫れが引いていくのが認められた。調査期間の終盤では、素人の私の目から見る限りは正常の状態に戻っていた。心配した2個体がケガから回復する様子を観察して、ありきたりではあるが、野生動物の生きる力はすごいなあと改めて感心させられた。 調査に関わる情報ではないが、このようなキリンの姿を観察できたことも、本渡航の大きな収穫であった。

図1. 画質があまり良くないが、右目が大きく腫れ、出血が認められる Adult Female。(7月26日)
<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: report@wildlife-science.org

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)



図 2. 図 1 と同じ個体で右目の出血が止まり、腫れが引いている様子が確認できる。(11 月 14 日)



図 3. Neonate の 2 頭

6. その他 (特記事項など)

本渡航は、PWS リーディングプログラムの支援を受けて行いました。プログラム関係者の皆様に感謝申し上げます。また、現地で大変お世話になった Katavi National Park の皆様に感謝申し上げます。